日常業務における感染防止対策

司会：橋本　　環[1)]，平山　和枝[2)]

新生児期は，免疫能の未熟性・常在細菌叢の未形成などにより感染防御機能が未熟であり，さらに在胎週数が少ない早産児や低出生体重児では感染に対し脆弱である．それに対しNICUへ入院となった場合には，集中治療の必要性からさまざまな感染発症の危険因子となる処置が行われる．そのため感染防止対策が重要となる．手洗い・手指消毒などのスタンダード・プリコーションが確実に行われる必要に加え，NICUの特殊性を考慮した感染管理が必要となる．現在，各施設において独自の感染対策が試行錯誤の上実施されており，その現状は「新生児看護技術標準化に関する検討委員会」からも報告されている．

ワークショップでは「全国のNICUを有する施設における，日常生活援助場面での感染管理の現状調査」から，手袋の使用が増加傾向にあることや，使用物品の消毒法等，管理方法に施設間で相違があることが報告された．調査結果から各施設で行われている「未滅菌手袋の使用状況」「保育器交換の意義と望ましい保育器交換」「MRSA除菌対策」といった感染防止対策の現状報告と，感染管理認定看護師からの「NICU感染対策と今後の課題」の意見を受け討論することになった．

各施設の感染防止対策の現状として，ミルクウォマーが湿式から乾式へと移行が試みられていることや，臍処置では多くの施設でアルコールが用いられていること，正常細菌叢の早期獲得のための母乳の早期授乳が試みられていることが明らかになった．また中心静脈カテーテルの管理やNICUにおける定期的監視培養と，感染症の発症をアウトカムとして評価していく必要があることが示唆された．

今回，各施設のNICUにおける感染管理の現状や取り組みについて，情報の交換と共有を行い討論の機会が得られたことで，NICUでの感染管理の重要性を再確認でき，今後の感染管理の一助となったと考える．

・Work Shop：Prevalence of hospital infection at Neonatal Intensive Care Unit.
・所属：1）埼玉県立小児医療センター，2）埼玉医科大学病院
・日本新生児看護学会誌　Vol.13, No.2：17, 2007